



巫女の
いる神社

川崎ゆきお

スケジュールが何もないというのは自由でいいのだが、これが曲者で、休憩でもしておればいいのに、何かやりたくなる。何もない時間が怖いのもかもしれないが、当然これは内側からの恐怖だ。ただ、怪談やホラーではないので、怖いと言うより不安なのだろう。

ポツカリと空いた時間、佐山は好きなことをして過ごせばいいのだが、特に趣味はない。行きたいところはあるが、仕事で方々回っているので、そのついでに見学できる。これがもし、仕事抜きで、観光や行楽だけで行ったとしても、何か頼りない。つまり、そんな場所で遊んでいる場合かと思うからだ。これは働いているほどの充実感がないためだ。お金が入ってくるのではなく、出ていくのだから、これが何となくもったいない。

三連休の二日目までは寝て暮らした。しかし三日目になると、さすがに飽きる。やはり、何処かへ出かけようと、家を出てみた。

しかし、行くところがない。普段から遊びに出たりしないからだ。そこで損をしないように、近場ですませようと、近所を歩くことにした。これなら交通費を使わないため、失敗しても損はない。そして、無駄遣いしないように、小銭をポケットに入れた程度だ。本人を証明するものとか、カード類は近所では必要ないだろう。むしろそういうのを持ち歩くことで、落とす可能性もある。

普段から近所を歩いていないため、すべてが新鮮に見える。引っ越しから三年になるが、駅前までの道沿いしか知らない。

観光地代わりに近所の寺社でも回ろうと、山沿いへ向かった。

どの辺りに神社や寺があるのは分からない。調べもしていない。

少し坂道になり、道も狭くなる。参道のように、小さな鳥居をくぐる。常夜灯のようなものが、両脇にあるが、中を見ると、何もない。ただ、蝋燭たてがある。正月にでもつけるのか、祭りの日につけるのかは分からないが。

有名な神社ではなさそうだが、やがて階段になる。だから、この階段の先は神社しかない。

上から降りてくる人がいる。

「あんたもかい、今空いてるはずだ。わしは終わったから」

「はあ」

男はにやっとしながら、階段を下りていった。腰が軽そうだ。

階段を上りきったところに、境内がある。本殿の横に渡り廊下と屋根が連なっている。そのため、少し建物が大きい。

佐山はせっかく来たのだから柏手を打つことにした。一円も使わず観光地を訪れた気分になった。

パンパンと適当に手をたたくと、すぐに返事が返ってきた。

何かと思い、神殿の扉、これは格子なので薄暗いの中が何となく見える。そこに人影。

「まさか神様」とは、さすがに佐山は思わない。なぜなら女性の声のためだ。

「上がりますか」

「あ、はい」

「その前に賽銭をお願いします」

佐山は、本殿の中で拝めるのかと思い、ポケットから五円玉を取り出し、賽銭箱に入れた。

「こちらの賽銭箱をお願いします」

巫女さんは格子を少しだけ開け、小さな賽銭箱を出した。佐山は十円玉を入れたが底が浅く、丸見えだ」

「ご冗談を」

巫女さんは笑っている。

「いくら何でも、それでは」

「ああ、はい」

佐山は百円玉を取り出し、それを入れる」

巫女さんは「ふーと」吐息をつく。

「少ないですか」

「万札以上」巫女さんは三日月のように目を細めて言う。

「え」

「あ」

佐山は財布を持ってこなかったことを後悔した。

了